

数百年前の古典籍の断簡 — 50点目の古筆切 —

短期大学 人間文化学科 中村健太郎



コレクション50点目の「永徳百首断簡」とともに

私が研究対象としている古筆切(こひつぎれ)は、優れた筆跡で書かれた奈良時代から室町時代頃までの古典籍の断簡です。数百年前の人々が実際に筆を持ち、墨で書き遺した和歌や物語は、現代の活字本にはない風格と筆者の息遣いを直に感じることができます。現代では、古典籍を切断分割するというと、本の内容を読むことが出来なくなり、貴重な文化財の破壊だと考えてしまいます。当時の人々も、少しは考慮していたようで、伝来の過程で落丁や欠脱が生じた不完全な形態で、かつ筆跡が優美な古典籍を優先的に古筆切にしていた様子が窺えます。つまり、当時なりの文化財保存のひとつの形であったわけです。江戸時代では、筆跡と書いた人物を尊重して、数頁から数行分の断簡を掛軸にして床の間に掛けたり、古筆手鑑(こひつてかがみ)というアルバムに貼り込んだりしながら盛んに鑑賞されました。

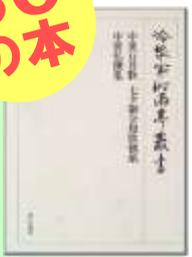
こうした古筆切が個人でも購入できることを知ったのは、高校生の時です。その後、大学1年の冬、研究会で訪れた京都で、はじめて古筆切を購入したことが本格的に研究を始めるきっかけになりました。学部生時代、くり返し熟読したのが藤井隆先生・田中登先生の共著『**国文学古筆切入門**』3部作です。学生でもわかりやすい古筆切の入門書として最適で、価格も他の専門書に比べて安い点がありました。

京都で購入した記念すべき1点目の古筆切は、見るからに良質な料紙に、墨痕も鮮やかに『**古今和歌集**』の和歌が書写されていることまでは、即座に判別できました。帰宅後、大学の図書館で詳しく調べてみると、なんと国宝の古筆手鑑「翰墨城」(MOA美術館蔵)所載の古筆切と同種と確認できたのです。この時の驚きと興奮は、その後の研究生活を決定付けた出来事でした。今回のテーマである50に因み、コレクション50点目の古筆切を最後に紹介いたします。冷泉為尹(れいぜいためまさ・1361—1417)自筆の「**永徳百首断簡**」という

古筆切で、冷泉家時雨亭文庫蔵「永徳百首」(重要文化財)の散逸部分に該当します。冷泉家の古典籍類は、江戸時代前期に一部古筆切として流出したことがあり、現在でも思いがけず発見できるチャンスが残されています。

数百年前の本の一部である古筆切は、研究資料であると同時に貴重な日本の文化遺産だと思います。これからの、新出資料の発掘と研究に邁進したいと思います。

(なかむらけんたろう/日本書道史、日本文学(和歌文学)、書誌学、有職故実)



『中世百首歌・七夕

御会和歌懐紙

・中世私撰集(冷泉家時雨亭叢書 34)』

冷泉家時雨亭文庫 編
朝日新聞社、1996

4階 和図書 (911.14/R-25/1)

『国文学古筆切入門』

藤井隆・田中登 著・和泉書院、1985。
(発注中)

公開講座

MELIC NEWS

「辞書引き学習」体験講座

(帝京ライフロングアカデミー春期公開講座2015)

帝京ライフロングアカデミー春期公開講座『「辞書引き学習」体験講座』をメディアラウンジで開催しました。参加者は近隣地域の44名の親子。「辞書引き学習」は調べた言葉に付箋を貼っていく勉強法です。子どもたちは遊び感覚で取り組むうちに、「知りたい」欲求が刺激され、どんどん辞書をひいていきます。「うさぎとかめ、先にでてくるのはどっち?」競って、辞書を

めくる音が会場に響きます。

帝京大学小学校で実際に「辞書引き学習」を導入している古野先生の事例発表もありました。「導入後は子ども達が自ら学ぶ力を見に付け、勉強に意欲をもつようになった」との言葉に大きくうなずく保護者も。「子どもが楽しそうだった」「親子で楽しめた」「家庭でも取り入れたい」と好評のうちに終了しました。



学習意欲がアップする注目の「辞書引き学習」

6月27日(土)10:30~12:00

@MELICメディアラウンジ

講師:星野昌治先生

(帝京大学小学校校長/初等教育学科教授)

ゲスト講師:木幡延彦氏

(株式会社ベネッセコーポレーション)